

『北海道非正規労働者白書』を執筆して



川村 まさのり
かわむら 雅則

09年、北海道で働く非正規労働者を対象にした調査活動を、連合北海道及び加盟産別と共同で行い、その結果を本書にまとめた。5千人を超える回答があり、自由記述だけでも1千人の声が寄せられた。調査の結果についてはすでに本誌(539号)でも紹介した



ので、ここでは、執筆に際しての問題意識を述べたい。非正規労働を巡る問題の深刻さについて、私たちは認識しているはずである。はずであると書いたのは、新聞報道やテレビに映し出される彼らの境遇、すなわち、雇用保険からそもそも排除された非正規労働者、かけ持ちで働いても貧困から脱出困難なシングルマザー、ハケン切りされネットカフェや路上をさまよう人々の姿をみて、私たちは、彼らに同情を寄せ、雇用責任を果たさない企業やわが国の社会保障制度の不備に憤慨するだろうからである。

しかし、同じ職場で肩を並べて働く非正規労働者が置かれた不条理、すなわち、仕事は恒常的に存在するにもかかわらず、短期間の有期雇用を反復更新して雇われ、同じ仕事を

している正規労働者との間に大きな処遇格差がみられることに対しては、どれだけ憤りを感じているか。それを正規・組織労働者に問うと、「いや、彼らからは特に不満は聞かれない」「万が一の経営環境の悪化を考えると全員の無期雇用化は難しい」「私たち正規と彼ら非正規とは、責任の重さがそもそも違うので：」等々と返答される。

なるほど、雇用責任のすべてを企業だけに課すことは、生産変動の予測が困難な現状では困難かもしれない。職務給をベースとしていないわが国では、同一(価値)労働同一賃金原則の確立はそう容易でないのもその通りだ。だがそれでもなお聞きたい。経営悪化のツケはひとえに非正規労働者だけが負うべきものなのか。しかもあらゆる面で不利益を強いられてきた彼らから先ず切られることに矛盾はないのか。正規と非正規の間の責任の重さには両者の処遇格

差を合理的に説明しうるほど違いがあるものなのか、と。

もちろん、問題を労・労対立の構図でとらえるつもりは毛頭ない。だが、非正規の怒りや鬱屈した思いがつもりにつきもって正規労働者に向かっている事実には、私たちはもっと敏感であるべきだ。事態はそこまで深刻なのである。そのことは本書で伝えたかった。そして、非正規労働問題を扱った書籍が巷間にあふれている中で、本書をまとめた意義がもしあるとすれば、まさにその非正規労働者の思いを、彼ら自身の語りで可視化したことだと思う。サイは投げられた。この取り組みを単なる調査活動で終わらせないで欲しい、という彼らの切なる願いにこたえる番である。

(北海学園大学准教授)

.....
* 頒価3000円。お申し込みは、連合北海道非正規労働センター、TEL 011(210)0050まで。